



えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑥

博物館では多くの史料を数カ月、その準備に追われ収集しているが、それらを整理した成果として目録を毎年刊行している。今月末には江戸時代の西条藩・小松藩・新谷藩に仕えた藩士に関する古文書を収録した目録を刊行するべく、こ

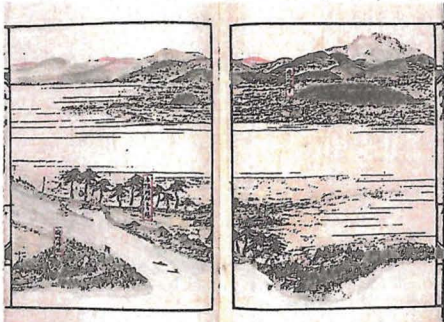
私が担当するのは西条藩士の和田家文書。この和田家は西条藩の水軍である船手方に属しており、歴代に当主は船の航行責任者である船頭役をつとめている。他の藩士とは異なり、船の操縦という特殊技術で生き残ってきた家である。

目録には文書の特徴を記した解題や主要な古文書の翻刻(くずし字を解読して

活字化したもの)も収録する。一点を改めて確認した。す

とわれ候で、われ口よりど

御船手向覚書



現在の渦井川の河口付近を描いた挿絵(「西條誌」巻四より)。河口部右手前に西条藩の船蔵があったが高潮被害で移転、その後御船蔵新田が開発された様子が描かれている

わる雑多な事柄が書き込まれた「御船手向覚書并浦役」という文書の中に、「伊予西条二而」と題して、宝永地震の記述があるのに気づいた。

文書には1707(宝永4)年10月4日の「午ノ中刻」に「大地震ゆり」とあり、地震発生時刻を正午としているが、いろいろな記録をみると、未上刻(午後2時)とするものが多い。

その次に「地形ふかふか

章が続く。これは地震後まもなく、西条の海岸部で液状化が発生したことを示している。しかも泥水が噴き出したとあるので、水や砂を吹き上げる噴砂現象も同時に起きていたことがうかがえる。本震が発生してから余震の回数も詳細に記し、最終的には翌年7月まで9カ月間も余震があったとしている。

(学芸課長・井上淳)

宝永地震の記述 詳細に

目録の筆者は和田家2代目の嘉平次と思われるが、勤務する船手方の近辺で目撃したことを記した可能性が高い。実際に西条藩が編纂(へんさん)した「西條誌」は1709年に台風による高潮が堤防を破り、船

蔵などの船手方の施設を陥没させたことだが、これも2年前の地震による地盤沈下が原因と考えられる。

一人の西条藩士が書き残した記録は、大地震後に瀬戸内海沿岸部で起こりうる地盤沈下の予兆がどのようなものなのか、私たちに伝えてくれている。

× × ×
掲載写真の文書は県歴史文化博物館(西予市)の特展「四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」で4月7日まで展示中。